



祈りがこたえられる

「だから、言っておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。」

(マルコによる福音書 11 章 24 節)

イエス・キリストを信仰する人に、地上の生涯で与えられるひとつの大きな喜び、それは祈りが答えられるということです。

信仰生活にとって、祈りが大切であることは言うまでもありません。祈りは神との真剣な対話です。祈りこそ信仰の原動力です。しかし、それほど大切な祈りが軽視されてしまい、お祈りしても何も変わらないとか、祈ってもいったい何になるのかという思いが心の中にくすぶってしまうことがあります。

こんな人間に対し、主は、祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい、と教えて下さいました。それは、祈り求めるものが得られるであろうとか、得ることが出来るかもしれないということではありません。「祈り求めるものは既に得られたと信じなさい」と言われるのです。

皆さんは、祈りの言葉がすらすらと出て来るものの、実のところ、それがみなかなえられるとは初めから思っていない人がいたら、どう思いますか。「いま神様に十のお願いをしたけど、それをみな神様がかなえてくれることはないだろう。十のお願いのうち、一つでも二つでもかなえて下さったら良いでしょう。あるいは、どれもかなえてくれないかもしれない」。この人は神を信頼していません。神がどれほど大きな力を持っているかということがわかっていません。お願いを並べ立てながら、どうせ神様は聞き入れては下さらないだろうなんて思っているとしたら、それは祈りというよりは独り言です。

神は私たちの祈りをかなえて下さいます。それも祈り求めた時には既にかなえられているほどに。

主イエスのもとに、悪霊に取りつかれた子供が連れて来られました。父親は「おできに

2011年7月発行
なるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」と願い出ました。主イエスは言われました。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」。父親はすぐに叫びました。「信じます。信仰のないわたしをお助けください」(マルコ福音書 9 章)。

「おできなるなら」、これは神に向かって言う言葉ではありません。そうではなく、神の力を信じるか信じないかです。私たちは、信じる者となることを学ばなければなりません。

では、そのことを踏まえた上で、神が答えて下さらない祈りについて考えて行きましょう。自分は一生懸命お祈りしているのに神様は聞いて下さらないとか、キリスト者になっても何年、何十年にもなるのに祈りがかなえられないという人はいないでしょうか。私たちはみな神の子です。それなのに自分の祈りに神様は答えて下さらないというなら、何はともあれ、これはあるべきではない事態に陥っているとみななければなりません。私たちはみな、神が祈りに答えられるということは何度も経験すべきだからです。

祈りが答えられる、そのために取り除かれなければならないのが罪です。人が心の中に罪をかかえていて、しかもそれを取り除けようとしなければ、神はその人の願いを聞いて下さらないでしょう。もっとも、これはたいへん困難なことで、パウロでさえも悩みぬいたことです。だからこそ、自分の中にある罪を、これくらいは良いだろうと思うのではなく、あらゆる罪を罪として認め、それらをすべて主イエスの十字架のもとに置かなければなりません。

信仰の世界に入ったばかりの人は、自分の幸せばかりを神に願います。しかし信仰が増してくるにつれ、自分の幸せより、神のみこころの実現を求める祈りが多くなってきて、それと共に、祈りが答えられる経験もますます多くなって行くのです。そのような喜ばしい経験を積み重ねて行くことが出来ますように。この願いは既にかなえられているのです。

(2011年6月5日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊